

# 概要報告

|      |              |
|------|--------------|
| 実施期日 | 7月28日(火)【午前】 |
| 部会名  | 小学校 特別支援教育部会 |

## テーマ 『自ら考え、進んで取り組む子の育成』

～児童の実態に応じた、交流級及び共同学習をするための合理的配慮とは～

### 提案概要

本市では、伝統的に「交流」が浸透しており、通常の学級に特別支援学級の児童がいるのが当たり前である。またそのための人員の確保等も配慮されている環境である。一方「交流」の課題として交流学級にすることが優先されやすいために、支援級児童のニーズや個々の実態に応じた支援が手薄になりやすかったり、互いに認め合うという実感にまで至らなかつたりするという点があった。

今回の実践では、上記の課題を解消するための取組を、1年生、3年生の算数（図形）で行った。方法は、交流級で学習する内容を先行して行う予習や、単元に必要な既習内容の復習を支援級で行ったりするものである。そのために児童の学習における実態を把握、交流級の担任や管理職と綿密な打合せをしっかりと、目標・指導計画・評価計画を立てて実践した。その結果、交流級での学習の際には、既に学習した内容であるため、自信をもって操作したり、活発に発言したりする場面が多く見られた。

今回の実践から、個別と集団での学習の利点を両方取ることができた。従来の個別支援を「合理的配慮」とし、授業の工夫を「インクルーシブ化」ということで位置づけることにより、通常の学級の担任とも、同じ視点で授業を検証することができた。

### 質疑概要

- ①交流級の担任とはどの位（頻度、内容）の打合せをしているのか。
  - ・単元計画は交流級担任と一緒に立てている。・学校研究の流れによって進めた。
  - ・クラスのことについて、たくさん話をした。
- ②個別に取り出して授業をしたり、在籍を変えたりというのは根本的なインクルーシブ教育の推進にはならないのではないか。
  - ・必ずしも、交流級にいることはないと思っている。まずは「同じ学校」という考え方でいる。子どもの状態に応じて、支援級で休憩をしたり、学習したりしてもいいと考えている。
- ③ユニバーサルデザインという言葉が出てきたが、今後もそのような研修が行われるのであれば、どのような手立てを考えているか。
  - ・職員の困り感をしっかりと受け止めて、たくさん話をしていくことが大切だと思っている。
- ④通常級に入って、支援級在籍以外の子どもの支援も行っているということだが、その具体を教えてください。
  - ・S.Cや巡回相談員の協力のもと、支援している。・管理職の理解があり、よく相談した。
  - ・学校としてはルールを明確にし、職員間でも統一を徹底した。
  - ・教育相談コーディネーターと支援級担任を兼務しているので、一斉学習が難しい児童を支援級で支援した。
- ⑤支援級在籍児童が支援級で過ごす時間は、どのようなものがあるか。
  - ・自立活動・国語・算数・音楽・体育・図工・栽培を合わせたような時間を週3時間設定している。体を動かしたり、栽培や調理をしたりと様々な活動を支援級独自で行っている。
  - ・給食時間は交流学級で食べるが、1週間に1回、支援級で食べている。
  - ・掃除は交流級で取り組んでいる。場合によっては支援員が付く。
- ⑥聞き取りや発声が難しい子の支援について、どのように考えているか。
  - ・その子にかかわる交流級の子どもたちに特別支援学級の教室に来てもらい、そこを基地として休み時間等に一緒に遊び、かかわりのある児童を増やしていった。また、時間を決めて無理なく交流級に行ける時間を設定した。そこで楽しく過ごすことが目的なので、嫌な思いをするようであれば帰って来るようにした。どの時間なら交流できるかを綿密に考えて行う必要がある。

## 研究協議概要

(支援級での手立て、工夫)

- 達成感があるように支援する必要性
- 教科を決めた交流ではなく、「2時間目」という帯での交流という方法
- お助けカードの作成「牛乳パックを開いてください」といった、助けてほしい内容をカードにして友達に見せる。
- その時の状態を見て、無理はさせない。
- 支援級が母体。学習は支援級が中心。
- 支援級担任が、支援級児童と交流級児童の間を取りもつようにする。
  - ・休み時間に鬼ごっこをすることで、通常級の児童も自然に参加。
  - ・図工の作品で遊べる物を展示する
  - ・七夕の飾り付けができるようにしておく
  - ・トランポリンの解放
- よだれや鼻水が汚いと思われてしまうことがあるため、ティッシュを準備する等の工夫が必要。
- 児童の実態を知ってもらうため、年に3回授業公開、協議を行う。

(交流級での手立て、工夫)

- 所属感を高めるために名簿に入れる、ロッカーや机の準備、係決めや席がえへの参加といった日常的な配慮。
- 交流級児童の働きかけ。
  - ・小さい頃からの友達の活用。「今〇〇って言ったんだよ」などと、教師よりもよく話を理解できる友達がいる強み。
  - ・日直がその日の交流時間を聞きに来る。
  - ・交流級児童が送迎をしてくれる←→自分で交流級へ行くような取組
- 見通しをもって活動できるようにする。
- 個別指導計画に沿った指導→保護者の理解にもつながる。
- ◆多人数の子どもたちを少数の職員で見ているため、交流へ行く際に付いていく人を確保することが大変。
- ◆全校に支援級があるわけではないので、子どもの人数が多い。

(学校全体での手立て、工夫)

- 職員同士の連携＝職員感のインクルーシブ化
  - ・学級通信をお互いに渡し合う。・交流級担任に、通信簿にコメントしてもらう。
- 支援級の設置場所の工夫。いつもは端にあった支援級の場所を変えることで、通りがかりに「次音楽だよ」と声をかけてくれるようになった。交流級の子どもたちの学びにもつながる。
- 「どうして支援級なの？」にどう説明するか。
  - 「～が苦手だからゆっくり勉強するんだよ」「少ない人数でたくさん先生がいると安心して勉強できるんだよ」「静かな所の方が落ち着いて勉強できるんだよ」等、答え方の工夫。
- 交流によって、挨拶や靴の置き方で支援級の児童が良いお手本になる事もある。

## まとめ概要

- 予習を行い、学習に見通しをもてることで、交流級での授業が振り返りになり、安心して授業に臨むことができる。またそれが、自己肯定感にもつながるし、学習内容もより身につく。
- 丁寧な見取りをすることで、「よくわかる」になり、子どもの笑顔につながる。
- インクルーシブ教育の推進は、支援級だけでなく学校全体で推進しなければ成り立たない。
- 支援級児童に分かりやすい授業は、交流級の児童にも分かりやすい授業になる。
- 「児童数に対する職員の数が少ない」「各校に支援級が無い」など、各地区によって支援級の事情が違い、交流が難しい学校も多くあるのが実情。
- 交流を行うには、教室の移動や校外での活動など、安全面への配慮が必要である。